

## 身分差別者会の真実

著者：齋藤洋一・大石慎三郎 発行：講談社

この本では、江戸時代の身分社会の中で、被差別民とされてきた「えた」「ひにん」の人々を中心にスポットを当て、彼らが当時の身分社会の中でどんな仕事や役割を担い、どんな暮らしをして、周りからどんな扱いを受けてきたかなどについて語られている。

江戸時代の被差別民と聞くと、差別的なシステムによって、あらゆる面で制限を受けるなど、常に過酷で貧しい生活だったというイメージを持ってしまいがちである。しかし、この本によると、当時の社会の中で「えた」「ひにん」の人々に対するケガレ意識や差別意識は確かに存在しており、周りから排除され苦しめられてはいたものの、当時は「武士」の社会の中にも差別は存在しており、「農民」だろうと「町人」だろうと差別の対象となる社会構造であったようだ。つまり、「えた」「ひにん」といった被差別民だけがいつも一方的に差別されていたわけではなく、また、被差別民の中にも地主や金持ちが存在するなど、全員が全員、過酷で貧しい生活を送ってきたわけでもなかったようだ。

僕らがかつて江戸時代の身分制度として学校などで教わってきた「土農工商制度」の矛盾点についての指摘とともに、当時の権力者が被差別民をつくることで差別意識を生み出したのではなく、元々社会の存在していた差別意識を権力者が上手く利用したと指摘する部分が特に印象的であり、これまで僕自身が持っていた江戸時代の身分社会に対するイメージを大きく変えるとともに、「現在も根強く残る部落差別意識と、その起源と歴史」について考えさせられる内容だった。

